

ろくおん 通信

発行日：1996年2月15日

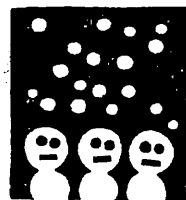
No. 79号

発行：盲人福祉センター録音製作係

「音声訳」を考える（第32回）

処理を考える（7回）

～ 漢字の処理 2 ～



今回は、漢字を問題にしている文章を取り上げてみます。この例文は、現在、音声訳者が苦勞しながら音訳しているものです。問題になりそうな漢字の部分をカタカナで表記し（注意。その読みが正しいとはかぎりません。）、番号を付けています。同じ番号は同じ漢字です。何らかの処理をしないと分かり難いと思われるところをそのままカタカナで表記してみました。元の漢字は番号順に最後にあげています。また、原文がカタカナで書かれている部分は下線を引いています。

森浩一著『古代史の窓』

ツシマとツシマ

戦後の考古学では、『古事記』や『日本書紀』の史実は、せいぜい五～六世紀ごろまで、それも部分的にしか遡らないとする風潮が強かった。僕のみるところ、古代史の領域でも、戦後すぐは崇神天皇のころからあと、それから応神天皇のころからあととなり、さらに厳密になって雄略天皇のころからあとなど、十年ぐらゐのスパンで変化している。

ところが埼玉県の稻荷山古墳の鉄剣に百十五字を刻んだ銘文があらわれ、その人名の一人獲加多支爾大王が雄略天皇と推定されるようになってから、“いつからあと”のような概括的な議論はあまり聞かなくなった。とはいえ、やはり弥生時代のことなど記紀にはまったく反映していないと考えている人が多いだろう。

僕がいつも不思議に思うのは、倭人伝ではツシマのことをツシマと表現しており、ツシマの表記法はそのあとどの時代も使われ、今日でもツシマである。つまり少なくとも千七百年のあいだ同じ字のあて方がつづいているのである。もちろん音韻学は僕の専門外だから、どうしてこの二つの漢字でその地名をあらわしたのかはわからない。

倭人伝でツシマと書いているだけでなく、『日本書紀』での国生み神話の地名でもツシマを使っている。このことは、おそらく『日本書紀』の編述にたずさわった人たちが『三国志』をよく読んでいたと推定されるから、ツシマの表記法をあてたのであろう。例えば奈良時代の太宰府にも、『三国志』などの中国の主要な書物は備えつけてあった。

土地の役割でいえば、ツシマはツシマである。これは『古事記』の国生み神話での表記法である。イキをイキ、サドをサドなどと漢字の音であらわしているのにたいして、ツシマは港(津)がいっぱいある島という意味のツシマを使っている。実際、ツシマを訪れると港がたくさんあるばかりか、そこには弥生時代に繁栄していた様子を物語る遺跡がたいがいある。佐賀県の呼子からフェリーが通っている印通寺の港の背後には、有名な原の辻遺跡がある。ツシマは考古学の遺跡からみると、弥生時代にいちばん賑っていたらしい。

太平洋側では、伊豆諸島にツシマがあった。この島は航海の要地ではあったが、火山があるため神の猛威が作った島としておそれられ、いつしかカミツシマ(こうづしま)とよぶようになった。それにしても、玄界のツシマがツシマ国になったのに、伊豆半島は別にすると、神津島など伊豆諸島だけでは国にならなかった。ここにも航海の要地とはいえ、対外交渉での重要性の違いがあらわれている。

佐用姫岩と倭人伝

倭人伝では、ツシマから壱岐、壱岐から末廬へと舞台が展開する。帯方郡から倭に派遣された中国の役人の紀行文にもとづいて記述されたのであろう。

マツロは、マツロ、『日本書紀』や風土記ではマツウラと書いている。ただしマツウラと書いても、マツラと発音することは周知のとおりである。倭人伝でマツラ(ロ)について、“四千余戸の家が山と海にそってある。草木がよく茂っていて前に行く人が見えない。魚やアワビ(アワビ)を盛んに捕っていて、深い海にもぐって取っている”と描写している。

僕はずっと以前に壱岐の印通寺から呼子までフェリーに乗ったことがある。船が呼子の港に入ってくると、うしろに山のせまった海岸ぞいに人家が帯状に並ん

でいるのを見て、倭人伝の描写のとおりだと感心した。それに海にもぐってアワビのとれるのは、今日の唐津市のような砂丘のつづく海岸は適しない。この点も呼子とその周辺の地形はぴたりである。それもあって、マツロの中心地は別にして、魏の役人が最初に九州島で印象にのこったのは呼子のあたりだと考えたことがある。九三年、唐津市に二度滞在する機会があった。美しいマチだ。その美しさの一つは海岸に長くつづく虹の松原のある砂丘であろう。だが古代人もこの風景を見たのだろうか。

これは唐津にかぎったことではないが、日本海沿岸に砂丘のある土地は少なくないが、海側の砂丘(三つ並ぶことが多い)の形成は古代までさかのぼるところは少ない。唐津でも、虹の松原の砂丘には古代遺跡の存在は知られていない。つまり古代にはもっと山側にいくつかの瀉のある地形だったと推定されている。

十月二十日、夜明けの鏡山の頂上に立った。衛星放送の生中継のためである。風土記や万葉集によると、鏡山はひれより褶振の峯といった。それは大伴まてひこ狭手彦が朝鮮半島に行くとき、サヨヒメ(オトヒメ)がこの山から船を見送りヒレ(一種のスカーフ)を振ったという。

山頂から見下ろすと、松浦川のほとりに巨岩の露頭がある。驚いて土地の人に聞くと佐用姫岩といって、サヨヒメが山頂から飛びおり、船を追ったという伝説のある岩石だそう。伝説はともかく、古代の唐津の海に岩礁があったとすると、アワビを捕っていてもおかしくない。それが倭人伝の時代か、あるいはそれよりずっと前だったかは今後の研究にまつ。

アワビを¹⁰アワビと書くこと

倭人伝では、マツロ(⁷マツロ)国の風景として魚やアワビを海にもぐって捕っていると書いている。今日アワビといえ、¹¹アワビと書く。¹⁰“アワビの貝の片思い”などと書くと“間違っていますよ”といわれかねない。ところが倭人伝では、¹⁰アワビの字を使っている。

余談になるが、十数年前京都の古道具屋をのぞくとアワビの殻を二つだきあわせ、それに漆で底と口を作った酒器を見つけた。百年ぐらい前、どこかに粹人がいて片思いなら二つを一つにしてやろうとして作らせたのかと想像してみた。少し値は張ったが、標本に買っておいた。『日本書紀』の允恭天皇十四年の記事に阿波国の海女の話がある。鳴門海峡にある無人の沖の島には海人集団の墓と推定される古墳があって、アワビ起しに使ったと考えられる長い石棒が出土するので注目されている。おそらくそのような集団にまつわる話であろう。

話の筋は、明石の海底の大アワビの真珠を取って淡路の神を祭れというので、一人の海人が取ることには成功したけれども命を落したという。ところでここではアワビにマムシの字を使っている。字典ではこの字は毒蛇のマムシだが、話の内容からアワビで間違いなからう。

古代での文字の許容範囲というか、応用力はたいへんおおらかである。『肥前国風土記』には、長崎県の五島列島の産物がでていいる。ここでは、鯛や鯖のように一字でタイやサバをあらわして、アワビはアワビの字にしている。

アワビのことを倭人伝ではアワビにしている。これは今日では使わないし、『日本書紀』や風土記でもいくつかの例を見たようになじまない。ところが八世紀に平城京へ諸国から運ばれたアワビにつけた荷札木簡でみると、アワビの字をよく使っている。アワビはどこの国からでも運ぶのではなく、千葉県10の房総半島の安房国や島根県の隠岐諸島からの木簡が多いが、たいていはアワビである。魚によっては、イワシをイワシ14とかイワシ15とか漢字の音を使って土地によって別の表記法があるのに、アワビ10はアワビでほぼ統一されている。

以下は僕の推定にすぎない。倭人伝にアワビの字を使っているけれども、それが古代日本人の字書代わりの役割をしたのではなからうか。平安時代の『延喜式』でも盛んにアワビ10の字が使われている。面白いことだ。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
津島	対馬	壱岐	伊岐	佐渡	佐度	末廬	松浦	マツラ	(口) 鯨
11	12	13	14	15	16				
鮑	蝮	蛸	伊和之	伊委之	神津島				

前回の例文リポイント

例文1

- ・「明らめ」が「諦め」でなく、「明らかにする」方であることを補足
- ・「タイ」が「諦める」という字であることを補足

例文2

- ・ナガコのナガがモリナガ親王のナガと同じでヨシという字であることを補足

例文3

- ・「カンショウ」の補足を、文章に出てきた言葉を使って、「感傷的のカンショウ」、「自然のカンショウのカンショウ」と補足する。

例文4

- ・最初の「。」は、読まなくて、それ意外の「。」を「ピリオド」または「終止符」などと読む方法もあるでしょう。

二通りの読みがあって意味が異なるもの・・・(40)

定番	テハソ 毎年一定の需要が保たれている商品 ジョハソ 江戸幕府の職名	様様	サマサマ ありがたい人や物の下に付ける語 サマザマ いろいろ
様	サマ 敬称、姿、かたち ザマ 様子などをあざけて言う	奥様	オクサマ 奥方 オクザマ 奥の方
人口	ジソウ ヒゲチ 他人の言葉、うわさ	人工	ジソウ 人手を加えること ニク 仕事に必要な延べ人数

きれいに録音するために(第20回)

録音した声が鈍くなる

自分の録音した声がいつもと違ってこもって聞こえるような経験した方はありませんか。この場合の原因で考えられるのは、

- ①ヘッドが汚れている
- ②カセットテープが傷んでいる

といったケースが考えられます。

①の場合ではヘッドの汚れを掃除しますが、カセットデッキの場合、なかなか掃除しにくいので、市販のカセットデッキヘッドクリーナー(SONY CHK-1 定価2,000円)などを利用すると良いでしょう。

②の場合は、カセットテープを取り出してみて、テープが傷んでいないかを調べます。テープに筋が入っていたり、傷んでいる場合は、新しいカセットテープに取り替えます。



リクエスト図書一覧

以下のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。
グループの方で引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。

- 『警視庁草紙 上・下』 山田風太郎著 <小説>
- 『幻燈辻馬車 上・下』 山田風太郎著 <小説>
- 『算命学中国占星術 第1巻～第9巻』
- 『狂信者』 (上・下) ハーランド・ラム著 <小説>
- 『仏陀再誕』 大川隆法著 <宗教>
- 『ジュラシックパーク 2』 上・下 <小説>
- 『可視光線総合療法』 <医学>
- 『復刻SFマガジン』 <小説>
- 『ミステリーマガジン』 <小説>



引き受けて頂いたリクエスト原本	グループ
『宮沢賢治とでくのぼうの生き方』 『君について行こう女房は宇宙をめざした』 『灯』1月～12月(12冊) 『人間尊重の心理学』 『今度こそ、やせる! ダンベル・ダイエット』 『愛・歌・心 歌生活40年誌 島倉千代子大全集』 『奇跡への祈り』 『「私」というもののなりたち』 『ホワイトアウト』 真保裕一著 <小説>	ICCB リクエストグループ テープライブラリーにしのみや “ えくてもあ “ “ “ “ グループ汐 堺グループ

お知らせ

『ろくおん通信』の更新について

グループの方へは、96年度の『ろくおん通信』の会費申込用紙を同封しています。96年度も引き続き、希望されるグループは申し込み用紙に記入の上、録音製作係宛お送り下さい。

550 大阪市西区江戸堀1-13-2
盲人情報文化センター 録音製作係